

昭和五十二年七月 恩欠連東浦支部連合会設立

会長

昭和五十二年九月 全抑協東浦原支部連合会設立

事務局長(平成五年六月連合会長)

(新潟県 吉田 忍)

私の青春・シベリアが憎い

福井県 天谷 小之吉

昭和十八年徴集、十九年二月広島へ仮入営、満州第六二部隊へ入隊しました。

兄が昭和十三年北支で戦死しているのです、故郷を私が出る時、父母はどんなにと思ったが、笑顔で送ってくれたので、安心して出征することができた。

二月とはいえ北滿の環境ではまだ毎日零下十度は下がって荒野は銀一色だった。

五月の検閲までは自由もなく、ただ厳しい教育訓練ばかりでした。終わると待っていたのが、陣地の対戦

車壕構築作業でした。そして、時折歩哨勤務もするころ、九月内地より補充兵の入隊があり、私は教育助手として活躍することになりました。

また、翌二十年二月に内地入営と現地入営の折半の初年兵教育助手もして、五月の検閲を終りとして、今度は二站陣地構築作業に行きました。八月九日、突然日ソ開戦となって、北鎮台陣地に戻りました。

戦争は二十一日まで続きました。もし、十五日の停戦がその日にわかっていたら、犠牲はもっともっと少なかったと思う。

武器を捨てた裸の関東軍将兵は、ウラジオ経由東京ダモイの言葉をまともに受けて、ソ連へ拉致されてしまった。そしてソ連で待っていたのは強制重労働でした。

ソ連は衣服もあてがわず、私たちは満州から着のみ着のまま。それをまだ銃を突きつけて略奪されるありさま。着替えが無いから雨の日も雪の日も、着たまま、着干しの連日でした。不潔になってやって来るのが、蛋、虱、南京虫、連日攻められて寝不足。

食事にしても、想像に絶する粗末なもの。猫や豚が横向くようなもの。でも毎日がひもじい空腹（腹五分目位の配給量）食べざるを得ない。また、食べなきゃ死んでしまう。

住家にしても私たちは、十月中ごろより十二月中ごろまで、天幕舎生活でした。毎日北西の風にあおられて、パタパタとなびく音で寝られず、また幕内の水蒸気が四つ角に大きな（半ピラミッド形）氷柱となって立っている。

正月前にやっと洞窟に入ったが、一個分隊十五名に對して一・八メートル四方二楯でした。（一人分の幅二十三〜二十六センチ）ここで起居しました。

ライチハは露天掘り作業が主であった。酷寒の中を、歩哨の銃に追われて、シベリアの受刑者である現場監督の指示に従って（ダワイダワイ）過激な労働が続けられた。私たちは毎日を不足ダラダラだったが、ライチハは休養や施設そして環境面においても最高に恵まれた収容所だと後日聞いて、他の分所に収容された方々は、余程の苦難苦勞だったと思うと氣の毒な思いがし

ました。

二十一年五月より八月まで、以後サビタヤ療養所經由、二十三年一月よりピランカン収容所にて、伐採作業に従事。七月ピロビジャン終結。八月九日ナホトカより遠州丸にて帰國。

①開戦

そんな無茶な命令があるか、相解った、直ちに行動を開始する、予は環璣に戻る。

飛行機もない、戦車もない、火砲もない、小銃すら足りない、ないないづくしで第一戦においては、十キロ弾を背負って戦車に、挺身奇襲して玉砕する以外はなかった。

いわゆる孫呉師団そして環璣旅団は、関東軍から見捨てられた、置き去り部隊だった。

第四軍司令部の命令を否認して、浜田旅団長が自己の信念と、現状主義に徹し、環璣北鎮台陣地を死守したことによって、孫呉そして環璣の將兵二万七千名の生命が、生き延びたのである。この事実を私達生存者は、片時も忘れてはならない。

八月九日、快晴。二站陣地構築作業中に、突然「作業中止、全員幕舎に戻ってこい」、我が中隊も隣の中隊も、また他の中隊も同じく叫んでいる。これはただごとではないぞと思いつつ引き上げた。

遂に来るものが来た。身も心も引き締まる、そうだ予てよりそのときはと、兵舎の手箱の中にしまっていた、我が最愛のB子さんが真心込めてつくってくれた、あの千人針を腹部に巻き締め、そして旧友達が書き染めた日章旗を頭に締めて、北鎮台陣地の鬼神となつて戦い、靖国神社のお柱に祀られよう、そんなことを考えながら長い夜道を歩き続けた。

小銃、軽機、擲弾筒、そして砲兵、工兵、有線、無線、軍馬の完全軍装の長蛇の列。そしてこの帰営部隊五千名の、前衛斥候長だった。徒溝子陣地に足を踏み入れた途端、(この陣地は八月十八日、陸、空、艦砲の総攻撃を受け、隊長以下百七十名玉砕)、この陣地の飯島隊長殿より誰何され、応答とともに緊迫した状況を聞き、旅団長浜田十之助閣下(昭和二十五年八月抑留中ハバロフスクで病死)は直ちに、第一次動員に変

更した。各自は小銃に実弾を装填し、着剣して速やかに各中隊受け持ち陣地の配備につけ。

その日の午後三時ごろより一時間ほどに、二百ミリの豪雨、まるで天と地が雨で連なつたような降り方でしたが、けろりとやんだ。

私たち三中隊はこの陣地の最南端で、三角台南丘陣地ここを死守、「佐々木隊長以下九十名」の命令を受けた。私は第三分隊(擲弾筒)長を命ぜられた。そしてその日の夕方各中隊より被服、弾薬、食糧と兵舎の焼却兵を出すよう指示が出た。私は弾薬受領に出た。

裏門近くまで行くと、荷物を積んで帰る車や、受領に行く車で右往左往。雨上がりの真暗な泥道を、ヨイショヨイショと、まるで火事場のような騒ぎだった。ここから自分の兵舎までは三百メートルはあろうか、あの手箱の中に形見の千人針と日章旗が、どんなに私を待っているだろうに、と思うといつも立っていてもいけない、だがしかし待てよ、ここはもう戦場だ、下手な行動はできない。皆銃には実弾が入っている、また兵舎の焼却兵も出ている。この真暗な暗夜に後髪を引

かれる思いの瞬間だった。K班長が「三中隊行くぞ」と大きな声で叫んだ。その声ではっと我に返った。

鉄車輪に積んだ弾薬は重く、前で引く者、後方から押す者、ともにヨイショヨイショの掛け声で、陣内に入っていくが、豪雨の後で谷間の道は泥濘と化して、足の踏み場もないありさまでした。途中増員して、漸く夜明け前、我が陣地に着いた。ちょうどそのころ、山神府や黒河方面の空が真っ赤に焼けていた。恐らく黒河の部隊が兵舎に火を放ったのであろう。我が駐屯地の放火は十一日の夜半だった。灯油を撒き放火した火の手が上がるのと、ソ連兵が侵入するのと同時だったと後で聞いたが、手箱の中には私ばかりでない、皆だれも彼も思い出の尊い形見の品や、貴重品があったはず、ただし誰も取りにいけず焼却されてしまった。

② 武装解除

八月二十一日、徒漕子陣地南端において、武装解除され丸腰となり、二重柵の敷地にソ連軍の誘導により入った。その周囲には軽機、重機、速射、迫撃、そして戦車の各砲先は、全部枠内に照準し、いつでも発射

できる体制を取り、各歩哨は(マンドリン)自動小銃を肩に下げ、厳重な警戒ぶりでした。

二十二日朝、五列縦隊で孫呉に向かって歩行。初めて接するソ連軍の印象について。上衣の服装はゆつたりとしたポロシャツ、下衣はタンク型のズボン、いずれも濃い草色だった。また帽子は二つ折りの舟型を斜めに乘せていたが、洗濯した様子もなく微かびしく見えた。体格は立派だった。二十歳前後で東洋人種が多く、目玉や髪は大半が黒だったが、中には茶目や赤茶の髪も見受けた。歩行中道路の曲がり角時には決まって威嚇射撃をする、その都度ドキッとしたり。

戦勝国ソ連とはいえ、歩哨の取った態度は余りにも非文明的、かつ貧しく感じた。我々の持ち物に対して被服類、日用品、特に財布や時計、万年筆等は、銃を突きつけて奪って行く。取り返しに行き射殺された者もいる。九月中ごろ作業一〇大隊(亀田隊)を編成、ウラジオ経由で内地に帰るといふ、騙されても文句も言えず拉致され、各コルホーズ(集団農場)で、馬鈴薯の収穫を手伝いながら、第十九地区ライイチハ收容所

に入る。

③炭坑作業

そのころの気温は零下三十度で連日下がっていた。

被服は満州で（開戦時）支給された、夏衣服と編上靴である。最近になって防寒帽と防寒外套、それに防寒手袋が支給された。いずれも旧関東東軍時代の古いものである。せめて給食でもよければまだ良かったが、まるで牛馬に与えるような粗末なもの、量にして腹に五分目ぐらいでは、寒さも一層強く骨身にこたえるのでした。風の強いときは鼻頭や耳等は、時折摩擦をしなければ、ただちに白蟻となる。実に恐ろしい。足もじつとしておればたちまち凍傷になる。

旧軍隊の編上靴で歩くことは、靴底が吸いついて、まるで磁気靴をはいているようで、一步進むごとに冷汗を流す思いだった。

午前八時、収容所を出て右折二回して、南に向かつて約一・五キロ進む。露天掘炭坑作業場に着く。すると付き添いの歩哨が現場監督のところへ行くと、各作業班ごとにその日の作業が割り当てられる。

朝食べた雑炊も若い我等には、もうグウグウ腹は減って鳴いている。このころの給食は余りにも残酷で今なお忘れられない。参考までに書いてみる。

朝ポミー（唐黍の粉）の雑炊、五等一。この数字は、飯盒の中身の五分の一のこと。その当時の雑炊といっても、箸にもかからぬもので、ただ濁っている汁で、餅の匂いがするから今日の雑炊は餅のだしかと思った。昼は乾ばん八センチ角ぐらい、暑さが一センチ程度のもの一人当たり二枚弱で、この乾ばんも、上官や古年兵に形の整ったものを渡すと、初年兵に配分するころは可愛想に、かけらばかりで量も減って、（だから初年兵の死亡率が高かった）、夜は朝と同様な雑炊の中に、ポミーでつくった団子が入っていた。ラムネの玉ぐらいの大きさが、一人当たり十個ほどだった。これだけの食事が二十日余り続いた。そして枕木運搬やレール運搬の重労働の強制。

このころが給食として最悪の状態でした。班長殿は「今日は当たりくじが悪かった、枕木運搬だ、事故のないように、気をつけてやれよ」。

枕木を肩に乗せたら確かに重い、少しでも早く連んで肩の荷をおろさねば、肩が食い込む痛さでやり切れない。百メートルから二百メートル遠いときは三百メートルを超える。凸凹道や凍水上のつべつべ道を冷汗をかきながら、一步一步身体で調子を取って歩む。だれしも終着点に着くとほっとする。全身汗ばんで帽子を取ると白い湯気が立つ、戻り道はぶらりぶらりと時間稼ぎ。そして始発点に着くとあまたかかと、枕木をじっと眺める。

人それぞれに利き肩があつて、反対側には乗せられない。同じ肩で何回も運ぶと赤く腫れて痛くなるが、今は囚われの身なんだ、いわれるままに、為されるとおりに、あてがわれたものを着て、あてがわれた物を食べ、決められた時間は寒くとも暑くとも、牛や馬の如く我慢して、例え骨皮になつても息の続く限り働かされた。私の身体も限界、軍隊当時六十キロあつた体重が、三十七キロ迄落ち込んだ骨と皮。

そして一重の幕舎生活、連日北西の風で、ばたばたと煽られ幕舎内は寒く、四ツ角には一メートル余りの

水柱がへばりついている。

小隊長殿はエネルギーの消耗を極力抑えるため、「必要以外は喋ることを禁ず、目を閉じて横になって休め」そうしてこの苦難を乗り切った、尊い体験だった。

④ 体感零下六十五度

朝ラーゲリ（収容所）を出たころは零下三十度前後で、風速北西七、八メートルだったから、普通の日と変わらなかつた。作業中も銀色の粉雪が風にまぎれて、さらさらと飛んで来るありふれた日でした。ところが午後になって急激に気温が下がり始めた。大寒気団接近の前触れだった。北北西の突風が時折り吹き、その都度一段と底冷えがし、皆がたがた震え出した。最悪の天候、風に向つては呼吸もできず、さりとて風に背を向ければ、背筋（骨身）が氷つくような痛み、恐ろしい冷え方だった。（このままでは皆やられてしまう）と思つた時、歩哨の一人が作業中止の命令を出した。そして山積みにした石炭に火を付けた。風に煽られた石炭はみるみる真赤になり、その火柱は風に薙ぎ倒さ

れて火の粉を飛ばす、その周囲に歩哨も監督もそして我々も、必死で暖を取り自分の身を守るのみだった。

炎熱に暖を取る表側と、その反対面を交互に、まるで餅や煎餅を焼くときのように、何しろ零下四十二度、風速二十数メートル、この数字は収容所での測定だから、荒野の作業場では想像に絶する酷寒だった。

当時私たちが身に着けていた防寒外套は、戦前関東軍時代に支給された、日本製で半防水カッパの内面に、少し長めの別珍（綿糸で作ったビロード）が貼ってあった。これは寒風には弱かった。ところで今日の寒波では何を着ても、寒さはみな同じかもしれないが、ソ連の防寒外套は汚れてはいたが、羊の一枚皮で風は遠さなかった。また保温力も強く日本との比ではなかった。

ところで冷たい痛いと言う感覚があるときはまだよかった。ただしその感覚がなくなると恐ろしい。急いで摩擦しなければ、血液が凝固し白蟻となる。大手袋のままでの摩擦では、其の効果は空しかった。たまたらずに素手を使うと今度はその手が忽ち白くなる。まさ

に悪夢であった。また防寒帽には耳穴があった。もちろんその穴には被覆は着いていたが、その隙間より入る風は実に強い、耳の鼓膜を引き裂くほどに痛い。大手袋で覆して一時を凌ぐ。

ソ連の歩哨も監督も我々と同じ一、二、一、二と足の跳躍運動をやっている。時折り銀の粉雪が突風で、矢のように被服を吹き抜けて肌身に刺す、あのときは人間として極限、足は絶えず跳躍しても踵骨の後部や、指先が麻痺して感覚がなくなってくる。

声をさらに大きく一、二、一、二と足踏みを続けたが、時折り眠気のような感覚で、意識が朦朧としてくる。周囲の者同士声をかけ体を叩き合うが「一、二、一、二」の声がだんだん小さくなり、かわって一人、二人その場で倒れ始めた。その時「ヤポンスキーサルダート、ダモイ、ダワイ、ブリテリー」「日本の兵隊帰るぞ、早く急いで」、歩哨が絶叫に似た声を上げた。皆は必死でラーゲリー「収容所」に向かった。

私もこのとき鼻の頭と耳たぶが凍傷に罹った。その部分は数日後にどす黒い色となり、やけど跡の様に爛

れてしまう。その後変形し、鼻の頭などは一センチ程も欠けてしまった。

この姿ではB子さんに会わず顔もないと思ったが、幸い翌年五月ころには元の形に戻った。それまでは何とも憂うつだった。この日の寒波で凍傷に罹り、手足の指など切断した人、さらに凍死した人もいたのだから、私はまだ幸運だったかもしれない。

シベリアでの初めての越冬は、抑留者最大の試練だった。衣食住ともに極限の状態で、重労働の連続、その中で迎えた冬の猛威は、弱った体に余りにも残酷過ぎた。

⑤ 南京虫の駆除

作業から帰ると少しでも疲れを癒すために身体を横にして休む。一つの洞窟に三つの電燈がある、ただし消燈後は中央の薄暗い常夜燈一つにして休むのでした。薄暗くなると決ってやってくるのが、私達の大敵南京虫である。天井からぼつんと顔の上に落ちてくる、そして吸血するのである。かゆいと思つてそつと手をやると血がべつとりと付く。南京虫はもうそのころはい

ない、どこかへ姿を消している。寝るとまた落ちてくる。この繰り返しが一晚中続く、毎夜連続であった。

一夜に数か所、多いときは十数か所やられることもある。朝起きるとだれも決まって、首筋にニキビのような姿に血の流れがある。南京虫にやられた特有の跡だ。夜中静かにマツチを擦ってみると、いるわいるわ天井裏の丸太の割れ目に、数十匹行列をなして逃げ隠れる。いたいと言つて叩き潰すが、南京虫の逃げるの早いこと、その内一匹殺せばよい方だ。あの潰したときの臭いこと、南京虫独特の嫌な匂い、鼻にぶんぶんと来る。それを承知で手の平を鼻の先に持ってきて匂いを嗅いでみる。臭い臭い、だれしも同じことをやっている。天井といつても一番高いところで一メートル二十センチくらいで、中腰でやっと立てるか、そして端の方で六十センチ位と思った。急に立つとだれしも頭を打つ、ここが私たちにあてがわれた部屋である。

栄養不足の上に毎夜南京虫に攻められ、睡眠不足が重なりばたばた倒れていった。この事実を聞いたハバ

ロフスクの某大官は、南京虫退治の発案、硫黄攻めと相成った。洞窟を密閉して硫黄三日間燃やせとの命令、その間は私達は隣りの洞窟へ厄介になったが、寝るところもなく窮屈そのものでした。

三日間が過ぎて開放して掃除をした。死亡している南京虫なんと三升余り(六リットル)、お蔭で翌日より安眠できるようになった。

⑥ 戦友との会話

ライチハ收容所の中央ぐらゐに、一か所の水源があり、ここの管理者が、私の戦友山田君である。「おーい水出してくれ」と呼ぶと中から「よっしゃ」と歯切れのよい返事が返ってくる。また時折り所外から若いマダムが、「ワダダイチ」水くださいと呼ぶと、「パジャルスター」どうぞと優しく答える、いっばいになると「ワダハラシヨシバシーボ」と言って、天秤棒でになって帰る。こんな光景をよく見た。若い女性の天秤棒をになった姿は実にかわいい。また目の保養にもなった。

私も時折り水汲みに行った。そしてその時初めて次

のことを打ち明けた。「実はなあ山ちゃん、山ちゃんの在所になあ、B子さんという子いるの知っているかい」「うん知っていると、おれの実家の近くなんだもの。天ちゃんなぜB子さんを知っているんだい」「それがなあ山ちゃん、おれの出征に際し千人針を毎夜歩いてつくってくれた恩人なんだ」

「でなあ、山ちゃんは傷痍軍人だから、おれより先に帰れると思うがなあ、もし先に帰ったら、B子さんによろしく伝えてくれ」「うん、どちらが先か知らんが、よっしゃわかった、約束しよう。」

そしてその後間もなく山田君と別れた。私も身体の不調でサビタヤ療養所へ転送となる。

⑦ 県の合い言葉

ここの療養所では毎朝点呼があった。十一月のある日のことでした。佐官級の軍医さんが型どおりの朝礼を終えて、しばらく思案げなそぶりをして、再び口を開いた。

「ごく個人的なことではあるが、今から言う言葉の意味がわかる者は手を挙げてくれ」そして次の瞬間大

きな声で叫んだ「アッパンケイ、アッパンケイ」とやった。その言葉を聞いて私は笑いをこらえ、恥ずかしそうに手を上げ周囲を見回した。この言葉こそ当時の福井県人でしかわからない、いわゆる福井県人の合言葉でした。(便所を意味する)今朝の朝礼には約五百人ほどが出ていた。

その中で十五名程度が手を上げた。それを確認した軍医殿は目を輝かし「今手を上げた者だけ残ってあとの方は解散してよろしい」この言葉で皆の者は散った。するとこの軍医殿は涙を流しながら、私たちの方に駆け寄った。そして「実は私は福井で生まれ、福井中学を卒業するまで、福井に住んでいたが、家の事情で東京に移り変わった。だがここに来てから福井県が懐かしく、福井の人に合いたくなった」と一人ひとりの手を握りしめた。私も「軍医殿、そうでしたか」と固く握り返した。

それから軍医殿は「身体を大切になあ、みんな元気で内地へ帰ろうや、帰ったらきつとまた会おう」とさうらに涙声で言うた。

軍医殿の東京の住所や名前を聞き、何回も復唱したメモ帳にも書き留めておいたが、メモ帳はソ連軍に奪われ、また記憶も薄れゆき、軍医殿のその後の消息も定かでない。その当時五十歳前後とお見受けしたが、丸顔で中肉中背の方でした。念願通り祖国の土を踏むことができただろうか。御幸福を祈り申し上げます。

⑧ バクダノフ・ソ連大尉

十二月に入って、このザビタヤ療養所から軽作業をしながら帰国する百人一組の枠に、私たち同室七人が相談の結果同行することになった。

出発の前日、久しぶりの入浴(シャワー行水)陰毛は全部すり落とす。(入浴してこれで三回目) 早朝三台の八輪車の荷台に、まるで家畜でも移送するように押し込まれて、延々二百数十キロ、吹雪の中を走り続けた。

着いたところは、シベリア鉄道ピラカン駅から北へ五キロほど入った山の中で、地名どおりピラカン収容所と呼んでいた。

療養所から来た弱兵ということで、一番奥の木造平

家（中二階）に押し込まれた。ここで三週間隔離生活をする事になった。

ある小雪のちらつく午後でした。外套を着た六十歳ぐらいのソ連人が一人、私たちの建物につかつかど入ってきた。そしてしばらく入口のストープで暖を取ると、私達の方に向き直り、日本語で「おい敬礼せんか」と笑うのであった。皆はきょろんとしている。また私たちの仲間の一人が「冗談言うな」と言う者もいた。するとその老人は外套のボタンを外し始めた。近くにいた者はあっと息をのんだ。外套の下は軍服で、その襟元には、ソ連軍の大尉の記章があったから、びっくりして「敬礼」、つい今までがやがやしていたが、一瞬水を打ったような静けさ。大尉はさぞ満足げに微笑みながら、さらに奥の方へ歩み出した。そして再び流暢な日本語で、「おれの名はバクダノフというソ連の将校だ。今から質問するから正直に答えてくれ」と前おきして一人ひとりの出身地を尋ね出した。「はい東京です」「はい長野県です」「はい三重県です」と順番に答えが続き、ついに私の番になった。「福

井県です」とそれまでは、ただ聞くだけだった大尉は、「福井県のどこだ」「はい今立郡です」「今立郡のどこだ」「鳥羽中です」と大尉は頷いて「それでは三十六連隊の膝元だなあ」「はい」私は内心戸惑った。一体何を調べたいのだろう。一方大尉は私とは対照的にだんだん陽気に、顔はほころび始め、揚げ句には夜遊びは鯖江の弁天か、それとも武生の新町かなどと、地名まで挙げて笑っている。そして大尉はなお話を続けた。

「ちょうど今ところは三国で獲れる越前蟹はうまいなあ、春は浜焼き鯖が最高だ。福井県は何と言っても新鮮な魚、それに織物が盛んで景色もよくてまた人柄もよい。非常に住みよいところだ」と言葉巧みに褒めていた。

実のところこの大尉は、戦前敦賀にあった領事館に、十五年も勤務したとのこと。

「あのころは三国から武生あたりを、よく歩き廻ったもんだ」。さらに大尉は「君たち日本人は日ごろ高い文明生活を送っていたのに、戦勝国とはいえ現在の

ソ連の生活には、さぞ不満だろうが、しかしもう少しの辛抱だ、近い将来日本に帰れるから、身体を大切に「してなあ」と皆を励ましていた。そして「外に福井県の者はいないか」と尋ねたが、だれも返事はなかった。大尉は間もなく出ていった。

日本に帰れる、大尉の激励の言葉は、確かにうれしかった。だが帰れる（ダモイ）この言葉は、いつもソ連人が使うダマシ文句に過ぎなかった。でももしこれが反対に、帰さないなどの言葉だったら、もっともつと悲観者が出て、悲劇を生じたであろう。

⑨ ビラカン民衆運動

ビラカン収容所には七百人余りいると聞いた。そのうち五百人は、元関東軍の特務機関の方ばかりで、その真相を隠すため各自が偽名を使い、また民衆運動も盛んにしていた。

朝は作業に出るまで二時間は当然のこと、夕食後は消灯までみっちり、共産党の勉強でした。それから日曜日等は個人演説等をさせられた。反動分子に対しては全員で総攻撃であった。もうそのころから寸暇の

油断もできなかった。

私たちザビタヤより一緒だった七人は、互いに助け合い励まし合っていた。作業でぐたぐたに疲れても、寝る時間を避けて勉強もした。また率先して行動もした。そのころ陽気にしておれば直ちに吊し上げられ、奥地のラーゲリーに転送させられた。

私たち七人のグループは、表面まじめに勉強もし、民衆歌等も歌っていたが、ある日の午後、昔懐かしい軍歌や、民謡を歌って楽しんでいた。ところが次の日曜日の午後のことである、私たちのグループにたちまち攻撃が始まった。先輩二百名の中で、私たち七名が吊し上げられた。

この七名とは、私と高井という北海道出身の二人は関東軍時代の二年兵で、あとの五人はいずれも初年兵でした。いつも私たち二人をまるで兄のように慕ってくれていた。だから私たちも弟のようにしてきたが、ここでこんな不幸な出来事に合うとは、夢にも思っていなかった。もう間近に帰れるというのに、反動分子として奥地に転送されては、と思うと身の毛がよだつ

思い、そのときだった、ふとB子さんのことを思い出した。ヨシどんなことになろうとも、この苦難を突破するぞと、力づいた。

向こう側の二百名の者は誰一人として、助け舟を出す者はいない、思想や主義においては血も涙もない、反動分子と思えば何の容赦もなく、徹底的に突いてくる。

最初私が壇上に呼び出された。私は壇上に登ると直ちに土下座して、同志諸君なるほど同志諸君のいうとおりだ、私たちの民主主義に対する勉強が足りない、また日も浅い、同志諸君、私たちをもっと、もっと鍛えてくれ、私たちも同志諸君と同じ身分だ、(ここでは内地という言葉は使えない)やがて日本に上陸(帰国)したときは、労働者農民を一人でも多く味方にして、二度と再び戦争の起きない、平和な国造りに邁進しなければならぬ、そのためには同志の祖国ソ連において、我々を少しでも指導してくれ、頼む、私も農民だと言うと、向う側の一人が寄って来て(それでは稲の刈り取り操作を説明せよ)。私はしめたと思ひ、

手まね足まねで論したところ、その同志は手を叩いてくれた。すると次々と全員で拍手合衆となった。その時同志の一人が飛んできて握手を求めてきた。今日から同志として頑張ろうと、私もうれしい余り力一杯握り返した。やれやれ私は同志として仲間入りできたが、あとの者も皆無事この難関を突破してくれと祈った。次々と一人ずつ出では土下座した。こんなばかきいまた阿呆らしいことはなかったが、生きて帰れるためなら仕方がなかった。日本人同志で本当に悔しかった。そして最後の一人高井君の番となった。

高井君も許してくれ同志諸君と、残念だろうが土下座して平謝すれば、それで終わってしまっただろうに、高井君は見るに見兼ねて、到頭堪忍袋の緒を切ってしまった。

「君たち何が同志だ、たとえ戦争に敗れたとはいえ、大日本帝国軍人たる者がソ連の手先となって、民主主義、民主主義とは何事だ、貴さまたちのような者がいたから戦争が敗けたのだ。

私は元陸軍憲兵兵長高井である。まだ君たちの様に

赤に化かされはしないぞ」と真赤な顔で怒鳴りつけた。さあ大変なことになった。全員の矢玉は高井君に集中した。こうなつては助ける方法もなかった。異国においては憲兵、警察、特務機関等の前歴のある者は、まるで仇のような取り扱いだった。だから皆前歴を隠すために偽名まで使い、またきびしい民衆運動も一つの偽装だった。ここにおいて高井君は自分から名のり出たから、始末に負えなかった。

攻撃はまだ続いたが、高井君は最後まで自分の信念を通した。本場に立派な帝国軍人だった。ただし残念なことに翌日某收容所に輸送されてしまった。生涯忘れることのできない、私の最も信頼する同志だった。御多幸を祈る。

⑩ピラカン駅構内作業

ピラカン駅構内で木材の貨車積み作業中、同僚の帰還する列車に遭遇した。たとえようのない複雑な気持ちでした。目頭が熱く、胸は堅く、言葉も出ない、そのうち「おおいどこから帰ってきたのか」「モスクワの近くだ。今日まで二十日も乗りっぱなしでもう飽き

た。ナホトカまであと何日かかるか」と聞いている。

「そうだなあ三日ぐらいだろう」と言う。「この煙草皆で分けて喫んでくれ」と差し出す者もいた。また一方では大阪の者はおらんか、一方秋田県の者はおらんかと、同県人を探し求めて自分の元気であることを、伝えてくれと叫んでいる、その声も半分涙ぐんでいた。自分たちもいつの日かあのような身になれるかと思うと、もう堪らなく無性に故郷が恋しくなってくる。

「ビー」汽車の汽笛と共に別れを惜しむ、皆涙ぐん中には泣きじゃくる者や、泣き沈む者までいたが、聴て歌に変わって気を紛らわしていた。

いざ行け我が同志よ 堅く腕結びつ
捧取なき自由の國 我が旗の元に

帰還列車に遭遇したのは五月六日だった。そこでの作業中にたしか三回出会ったが、いずれも後味の悪いこと、正直言って淋しい、悲しい、孤独感、切ない思い、羽があつて翔べるなら、闇夜密かに飛んで帰るだろう、翔ぶ鳥を何度眺めたことか。

七月十三日

駅構内清掃作業中突然歩哨が、「ヤポンスキーラポ
タ、カンチャイ。ザフトラトウキョウダモイ」。この言
葉を聞いて、一同飛び上がった喜んで。

待ちに待った帰国命令、万感胸に満ち溢れる喜びで
一杯だった。

歩哨の笑顔も最高。通訳と二人並んで一人ずつ握手、
終わると元気よくラーゲリへと引き上げた。

⑩再会の夢

あれから三十年昭和五十二年から毎年、当時のソ満
国境守備六一二部隊（開戦時一三五旅団・第一〇シベ
リア作業大隊）の戦友会が行われる。そして当時を偲
び元気で帰国できた喜びを語りあう。やはり入ソした
年の越冬だった。微風とはいえ北西七、八メートルの
風、気温は零下三十度を越える寒さ、そして被服が悪
くその上着替えがなく、雨の日も雪の日も、着たまま
着干の連続、食事にしても想像に絶する粗末な物、量
にしても腹に五分目位、来る日も来る日もひもじい、
ひもじいの毎日、其の上重労働「ノルマ」の強制、絶
えず銃を持ったソ連兵の監視付き。そしてまた環境が

悪い。二メートル四方の板の間上下二楯に一個班十五
名が起居させられた。

九月から十二月まで入浴できなかった。蛋、シラミ、
南京虫に攻められ睡眠不足。人間として生きる極限を
越えた生活環境だった。だからここの収容所で七百余
名が、赤痢と栄養失調で骨皮になって死亡した。

それ故にいつもこの会合のときは、同胞犠牲者の冥
福を一番先に祈っている。そして酒が進むに連れてB
子さんのことを思い出し、山田君と語り合う。

開戦の前日まで文通があった。抑留中は再会の夢を
見て、ここで死んでたまるか、出征の前夜仲人を依頼
したことは忘れない。

今帰還列車の中で、ひょいとする、B子さん、私
の家に来て、否近くの駅まで、迎えにきて待ってるか
もしれない。

くだいようだが思えば北満の荒野の果てに、玉砕部
隊と見捨てられ、戦後はシベリアの流刑地で奴隷生活、
長い長い歳月に、望郷の念募る毎日、その一日、一日
を千秋の思いで待ち焦げた。念願叶って再会のときが

来た。筆舌に尽きせぬ感無量、嬉しさ一杯、日子さん

(福井県 山口 速雄)

と叫ぼうか、B子と呼んで飛びつこうか。嗚呼再会の望みは無情にも、神は我に与えてくれなかった。惜しんでも、惜しんでも、帰らぬ我が青春。シベリアが憎い。

シベリア抑留からの帰還

神奈川県 鈴木重雄

【執筆者の紹介】

現住所 福井県鯖江市神明町五丁目四一五十七

本籍地 福井県鯖江市鳥羽中町十六一

生年月日 大正十二年三月二十五日

入 隊 昭和十九年二月十日

関東軍瓊瑯六一二部隊

終戦時の居住地 満州国黒河省瓊瑯南丘陵地

入ソ日 昭和二十年九月十日

抑留地 ライチハ

作 業 炭坑

引 揚 昭和二十三年八月十二日

引揚船 遠州丸

上陸地 舞 鶴

私は昭和十九年十二月、東部第六部隊(東京港区赤坂)に北支派遣軍要員として、第一一七師団(弘)一

四六八部隊独立歩兵二〇四大隊第四中隊に入隊、河南省汲県で大隊集合教育の終了前に、三月中旬老河口作戦の南陽攻撃に参加のため教育は中止された。

昭和二十年五月に師団に対し満州転出の命令が出る。

関東軍は南方戦線に転出のため、六月二十八日山海関を通過、関東軍第四四軍、本郷良雄中将(奉天)の指揮下に入り、八七旅団司令部とともに、満州龍江省白城子飛行場整備につき、対ソ連戦に備え、対戦車爆雷訓練、蝟壺掘り等行方。

八月九日、ソ連は日ソ中立条約(昭和二十一年四月まで有効)を無視して、対日宣戦を布告し攻撃を開始